旧五高蔵ドイツ語学書

上村　直己

熊本大学附属図書館の別館には旧制第五高等学校所蔵の図書が保存されているが、その中には英語・ドイツ語・フランス語など語学関係のものが多量に含まれている。旧制高校では語学教育に最も力点が置かれ、時間数も今の大学教養課程のそれよりはるかに多く、さながら外国語学校の観があった。五高の蔵書に語学書が多いのはそうした事情を反映している。ドイツ語関係では、明治・大正時代に我が国で使用された教科書や参考書の主なものは大体揃っている。これは特筆すべきことだ。この方面で最も多く所蔵しているのは国会図書館だが、古いドイツ語の教科書類を熊大ほど多く保存している大学図書館は他に余りないのではないかと思う。特に明治時代に使用された洋書に貴重なものが多い。以下概略を紹介しよう。

語学の勉強に欠かせないのは辞書であり、いかに辞書を上手に活用するかに上達の秘訣がある。それで日本でも明治から今日にいたるまで多くのドイツ語の辞書が作られて来た。日本の独和辞書の歴史は、独英の複数の辞書を底本とし見出し語・綴字・分節法・発音・語義解説・語法・用例等の情報を全部ないし殆どを依存し、訳語や訳述の様式を先行の独和辞書に仰ぐ、といった編集方法が普通である。明治１０年代以後の独和辞書にその底本として使われた原書が殆ど揃っている。例えば明治を代表する辞書の一つである福見尚見・小栗栖香平編「独和字典大全」（初版・明治１８年、国文社）の序文には「ホフマン、ハイゼ、ウェーベルを原書として、ウェーニヒ、ブロックハウス、マイエル等を参考にした」とあるが、それらのドイツ語辞書は Heyne や Sanders の辞書と共に全部揃っている。ほかにアドラー独英字典があり、ホフマン他国語字典もある。

最も多量に保存されているのは各種の読本（リーダー）である。明治前期にはまだ日本人が編集したものが稀であったので、ドイツから輸入したものを用いた。ヘステル（正しくはヘステルス）読本とボック読本がその代表である。いずれも第一から第四読本まであり、第一読本は Fibel と称し、先ずこれによって綴字・発音・習字を徹底的に学んだ。概して明治時代にドイツ語を学んだ日本人にはドイツ人と見紛うような見事な筆跡の独文を書く人が少なくないが、これはドイツ文字・ラテン文字の習字に時間を懸けて練習したからであろう。ヘステル、ボック両読本は元来ドイツの小学校用教科書で、動植物や鉱物など事物についての短かい読章を収めたものである。この後に導入されたリューベン・ナッケ読本（全５巻）も大体同様である。明治２０年前後にはこれら初級読本に代わって Hopf・Poulsiek, Kehrein, Bone などのやや程度の高い諸読本が登場する。いずれもいかにもドイツ的と思わせる装幀の重量感のある本であるが、分厚いものだけに教科書としては余り普及せず、むしろ教師の間で多く使われたようだ。明治３０年代に至るまで高等学校をはじめ諸校で最も広く用いられたのはエンゲリン読本（全４巻）で、五高生もこれによって学んだことは同書が多数保存されていることから分かる。このエンゲリン読本と並んで明治中期から後期にかけて普及したリーダーに、英国出版のブッフハイム編「近代ドイツ読本」（Buchheim: Modern German Reader）がある。２巻から成り、巻末に英語による注が付いているのが特徴で、東京帝国大学の雇教師Ｅ．ハウスクネヒトがドイツ語の授業で用いて以来、その優秀性が知られるようになった。内容もさることながら、分量も適切で、その上新書判に近い大きさだったので携帯に便利であったことも該書が普及した理由だろう。ちなみに、同じ編者によるドイツ古典文学の一つ「ハイネ散文集」（Heines Prosa）が約５０冊ほど保存されており、どれもハルツ紀行のところには多くの書入れが見られるのは興味深い。ハイネ好きの教師が指定図書として買い揃え、生徒たちに講義したものであろう。明治末から大正初期にかけてクローン「ドイツ日常生活」（Der Kleine Deutsche）や Berlitz, Worman, Alge 等の読本が登場した。Worman 読本は特に陸軍幼年学校で好んで用いられたが、五高でも使われた。なお、明治１０年代からの２０年代にかけてドイツ語の教科書として万国史や地理書が用いられたが、その代表のウェルテル万国史とウェーベル万国史及びダニエルとサイドリッツの地理書も揃っていることを付記しておきたい。

文法書では先ずシェーフェル独逸文典が挙げられる。

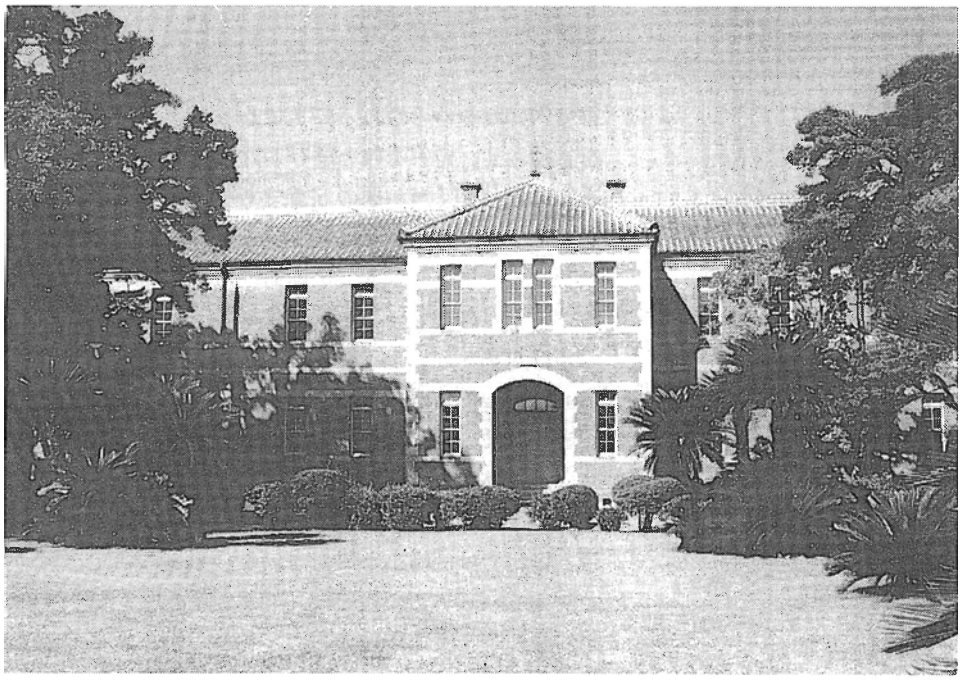
既に明治５，６年ごろから使われているが、盛行を見たのは明治１０年代で、ヘステル読本と共にドイツ語教科書の２本柱であった。初級文法書でヘステルの第一を終えると直ちにこれに就いて学ぶのが普通であった。品詞論と文章論から成り、説明が懇切で、例文も多く初めてドイツ語を学ぶ者には最適であった。原書、翻刻本とも行われたが、翻訳も各種出ている。シェーフェル文典より詳しいのがハイゼ文典である。これには大文典（Leitfaden）と小文典（Schulgrammatik）があり、森鷗外は後者で学んでいる。明治２０年代になると、米国のＦ．コンフォートの German Course 及び、これに少し遅れて導入されたＥ．オットーの独英会話文法など英文の文法書が高等学校を中心に広く用いられるようになった。ほかに五高では Wilmanns や Krause の文法書も教科書として用いられた。書簡文範（Briefsteller）では有名な Rammler や Campe のものがある。東京外国語学校その他で教えたＥ．ハリールには Bausteine とか Lehrprobe と題する中級リーダーがある。

洋書に比べると日本のドイツ語学者の編著は少ないが、主なものに大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎の「独逸文法教科書」（三太郎文法として親しまれ大正中期まで使われた名著）、同じ編者の「独逸語入門」「独文読本 」「 新撰独逸名家詩文抄 」 のほか、崎山元吉「独逸学捷径」、水野繁太郎「独逸語自修書」、国吉直蔵「簡明独逸文典」等がある。筆者の注意をひいたのは、独逸語学校蔵版の「独逸読本」（全３巻）「独逸文典」「精撰独逸読本」（明治２７～３０年）が著者・高橋金一郎によって寄贈されていることだ。高橋は専門の医学よりも衆目の見るところドイツ語学に優れていた人である。「独逸文典」は日本人の手になる最初の詳しい文法書で詞論と文論から成り、「独逸読本」は前記 Buchheim 読本の影響を受けているが、今見ても立派なものだ。独逸語学校は明治１９年に東京・本郷に開設された私立のドイツ語学校で、若き日の高橋や土肥慶蔵、藤代禎輔、登張竹風（信一郎）などが教えたところである。

五高のドイツ語教師たちの著作も勿論ある。初代のドイツ語教授を務めた賀来熊次郎の「独逸語学階梯」「 独逸語学階梯案内 」「Schillers Historische Skizzen」をはじめ、後年我が国のドイツ語界に大きい足跡を印した青木昌吉の「邦語独逸文典」「邦語独逸文章論」（いずれも博文館・帝国百科全書の中）もある。わざわざ「邦語」と断っているのは奇異に思われるかも知れないが、当時は洋書を用いる場合が多かったのである。ほかに、後に広島陸軍幼年学校教授になった三谷金女三の「独和二対実用会話篇」、五高教授を辞め初代福島市長に転身した二宮哲三の「独逸文典原理 」、新教神学校の出身で、強烈な個性で知られ、後に一高教授になった丸山通一の「 独逸音声学大意」（皇国学生必読）などもある。五高ドイツ語科のシンボル的存在だった小島伊佐美も文法書や読本を数種残している。第五高等学校龍南会編「新撰独文読本」などもある。

以上明治時代の蔵書を中心に紹介した。これらは今では顧みる人もなく埃をかぶっているが、それでは惜しい。現在でも教育研究の資料として活用できるはずだ。とにかく、こうした重厚でオーソドックスなドイツ語の教科書をはじめ辞書や参考書を多数所蔵しているのは本学の誇りだ。五高の遺産は決して漱石やハーンだけではない。

（かみむら・なおき　教養部教授　独逸学史）



（五高記念資料館）